大つごもり（樋口　一葉）

行ちがへに三之助、此処と聞きたる白金台町、相違なく尋ねあてゝ、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕々のぞけば、誰れぞ来しかと竈の前に泣き伏したるお峯が、涙をかくして見出せば此子、おゝ宜く来たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉さま這入つても叱かられはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお礼を申て来いと父さんが言ひましたと、子細を知らねば喜び顔つらや、まづ〳〵待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に余念なく、小僧どのはまだお使ひより帰らず、……若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中、拝みまする神さま仏さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお当てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれど此金ぬすませて下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して帰したる始終を、見し人なしと思へるは愚かや。

我牢獄（北村　透谷）

現に於ける我が悲恋は雪風凛々たる冬の野に葉落ち枝折れたる枯木のひとり立つよりも激しかるべし。然り、我は已でに冬の寒さに慣れたり、慣れしと云ふにはあらねど我はこれに怖るゝ心を失ひたり、夏の熱さにも我は我が腸を沸かす如きことは無くなれり、唯だ我九腸を裂きて又た裂くものは我が恋なり、恋ゆゑに悩ゆるにあらず牢獄の為に悶ゆるなり、我は籠中にあるを苦しむよりも我が半魂の行衛の為に血涙を絞るなり。雷音洞主の風流は恋愛を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり、然れども我が不風流は牢獄の中に捕繋せられて然る後に恋愛の為に苦しむ、我が牢獄は我を殺す為に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死することを憂ひとはせざれども我をして死す能はざらしむるもの則ち恋愛なり、而して彼は我を生かしむることをもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち喞たしむるのみ。

春や来しと覚ゆるなるに我牢室を距ること数歩の地に黄鳥の来鳴くことありて我耳を奪ひ我魂を奪ひ、我をしてしばらく故郷に帰り恋人の家に到る思ひあらしむ、その声を我恋人の声と思ふて聴く時に恋人の姿は我前にあり、一笑して我を悩殺する昔日の色香は見えず、愁涙の蒼頬に流れて紅ひ闌干たるを見るのみ。

敢て同胞兄弟に望む（清水　豊子）

廿三年国会開設の暁ニハ国会議員たらん事を予期するの紳士もあるを憶ふに、これらの人々ハ必竟人権の重んずべきを知れバこそ自由を主張するならん。立憲政体を企図せしならん。しかして人とハ男女を概括するの名称なるハ万々知悉するところならん。しからバ則ち男権女権に論なく共にその権利を拡張するハ当然ならずや、今一歩を仮して論ぜばよしや女権の拡張を計るまでニハ至らずとも、これを浸害するの行為ハ勉めて避けざるべからざるにあらずや。しかるに今得意然揚々乎として弱者の肉を食ひ我が姉妹の繊弱に乗してその抑圧を逞ふせんとするこれあに諸君のいわゆる男子らしき行ひならんや。今仮りに諸君が採るところの主義の表を作らば／（すべて人の権利は同一なりしかれども婦女の権は男子より小なり）／といふが如し。これあに論理に適したるものならんや。人の権は同一なりといハハ、男女を一様と観念せざるべからざるにあらずや。我が兄弟は我が姉妹よりも高等の教育を受け、あつぱれなる議論家もあり奥妙の理を極めたる大見識家もありながら、かくのごとく誤りたる論理を是認さるるハ、便宜のためか、私情の故か、もし婦女は器械なり玩弄物なり故に汝等の権利は例外なりといふにあらば、妄また何をかいはん。

怪談牡丹灯籠（三遊亭　円朝）

新三郎は止せばいゝに念仏を唱へながら蚊帳を出て　窃と戸の節穴から覗いて見ると　毎時の通り牡丹花の灯籠を下げて米が先に立ち　後には髪を文金の高髷に結ひ上げ　秋草色染の振袖に燃へる様な緋縮緬の長襦袢　其綺麗な事云ふばかりもなく　綺麗ほど猶怖く　これが幽霊かと思へば萩原は此世からなる焼熱地獄に堕ちたる苦みです　萩原の家は四方八方に御札が貼てあるので二陰鬼が臆して後へ下がり米「嬢様とても入れません　萩原様は御心変りが遊ばしましてきましたから　迚も入る事は出来ませんからお諦め遊ばしませ　昨晩の御言葉と違ひ貴嬢を入れないやうに戸締りが付心の変つた男は迚も入れる気遣ひはありません　心の腐た男はお諦めあそばせ
と慰むれば

嬢「あれ程迄に御約束をしたのに　今夜に限り戸締りをするとは　男の心と秋の空　かわりはてたる萩原様の御心が情ない　米や　どうぞ萩原様に逢せてをくれ　逢せてくれなければ私しは帰らないよ

新編浮雲（二葉亭　四迷）

慕はれるのが何となく快いので有らうが、それにもまた自分ハ心附いてゐまい。之を要するに、お勢の病ハ外から来たばかりでハなく、内からも発したので、文三に感染れて少し畏縮た血気が今外界の刺激を受けて一時に暴れだし、理性の口をも閉ぢ、認識の眼を眩ませて、おそろしい力を以て、さま〴〵の醜態に奮見するので有らう。若し然うなれば、今がお勢の一生中で尤とも大切な時、能く今の境界を渡り課せれば、此一時にさま〴〵の経験を得て、己の人と為りをも知り、所謂放心を求め得て始て心で此世を渡るやうになら うが、若し躓けばもうそれまで、倒た儘で、再び起上る事も出来まい。物のうちの人となるも此一時、人の中の物となるも亦此一時、今が浮沈の潮界、尤も大切な時で有るに、お勢ハ此危い境を放心して渡ツてゐて何時眼が覚めようとも見えん。

此儘にしてハ置けん。早く、手遅れにならんうちに、お勢の眠つた本心を覚まさなければならん、が、しかし誰がお勢のために此事に当らう？